
想いの憩う場所

維 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いの憩う場所

【Nコード】

N5636P

【作者名】

維 黎

【あらすじ】

遠く離れてしまった恋人を想い日々気持ち沈んでいく郁子。ある日たまたま入った喫茶店で起こる偶然の出来事によって、郁子は自分の中にある想いに改めて気づき、新たな一歩を踏み出していく。

『偶然』をお題にした短編ストーリーです。

（前書き）

前作に引き続き数年前に書いた作品で『偶然』をお題にしたお話です。

あなたには誰よりも想う人がいらっしやいますか？

あなたには誰よりも想ってくれる人がいらっしやいますか？

想いが育み 恋となり

恋が実って 愛となり

愛が重なり 幸となる

この世に人は数多^{あまた}あれど

想いもまた同じ

ひとつひとつの想いには

それぞれ違った物語

想いが実るその日まで

永い、永い時間の旅路

しばしの休息いかがでしょうか

香りたつ一杯のコーヒーと共に

大きな窓越しに見える人波は、何かに急ぎ立てられるかのように足早に歩いていく。まるで自分がある世界とは別の世界の光景のようだ——郁子^{いくこ}はふとそう思う。それは、今流れているゆったりとした音楽がそう感じさせるのだろうか。

昼食には少し遅い時刻。いつもより仕事に手間取った為、お昼の休憩がずいぶんとずれ込んでしまった。特に何が食べたいと思う意

欲もなく、かといって休憩の間中職場の椅子に腰掛けているのは、なんだか老け込んでしまったように思えて、外をぶらぶらと歩き、たまたま見つけた喫茶店で郁子は時間を潰していた。

同僚や後輩から一緒に食事にはいかないかと誘われたが、食欲があまりないからと断った。見るからに元氣のない郁子に氣を使ってくれていたのだろうが、あまりしつこく誘われることはなかった。だいたいの事情を知っている者もいるだろうし……。

窓の外を眺めていると、仲睦ましく楽しげに腕を組んで歩いて行くカップルが目に入る。知らず知らずの内に、目を細めて二人の姿が見えなくなるまで追っていた。

少し前までは、自分も眺められる立場だったのに……。

ふう、と吐息のようなため息のような息を吐くと、一口コーヒーに口をつける。

「——おいしい」

自分では意識せずに洩れた言葉に驚く。どんよりと曇った天気のように暗く沈んだ胸の内なのに、コーヒーが美味しく感じるなんて——郁子は、泣き出したいような笑い出したいような気持ちになる。最後に信之のぶゆきの声を聞いたのはいつだっただろう。以前は毎日のようにお互いに連絡を取り合い、週末にはデートを重ねてきた。

唐突に海が見たいと思ひ夜中にドライブに出かけたり、買い物しようとして半日街を歩いて結局何も買わなかったり。それでも郁子には充分に楽しかった。特に行きたい所や、何か欲しいと思ったことはない。ただ二人でいることが、信之の側にいることが幸せだった。ずっと続く幸せだと思っていた。でも、今は……。

二人の想いに距離を感じるようになったのは、信之の転勤が決まっただけで経ってからだ。よくある話なのかもしれない。いわゆる遠距離恋愛だ。

最初の頃は、もちろん頻繁に会うことはできなかったが、毎日の連絡は欠かさなかった。お互い携帯電話のメールで連絡し合い、空

いた時間があれば、例えそれが僅かな時間であつても言葉を交わした。携帯電話を忘れたときなどは、会社を遅刻してでも取りに帰ったりもした。

それでも遠く離れてしまった距離は、二人の想いに少しずつズレを生んだ。

会えない不安、寂しさ。

そういつた感情が大きくなってゆく。以前ならお互いの顔を見るだけで、すぐに笑顔を取り戻すことができたのに、今ではそれができない。些細なすれ違いが重なり、ちょっとした言葉に負の感情が芽生えてしまう。時には声を荒げて叫んでしまう。

信之のことを信じてはいる。けれど、心のわだかまりを拭うことはできない。

誰か他の女性を好きになつてしまふかもしれない。

自分から離れていつてしまふかもしれない。

自分もまた、今と変わらず想い続けることができるだろうか……。無理やり押し込めようとしても、不安は日に日に大きくなつていく。

側にいたいのに。側にいて欲しいのに。

一人ゆつくりと落ち着いてみると、素直にそれだけを思う。

また一口コーヒーを飲む。本当に美味しいコーヒーだった。身体だけでなく、心まで優しく暖めてくれる気がする。

——パリーン——！

その時、コップの割れるような音がした。

音のした方を見ると、小さな男の子がグラスを落としたようだった。側にいた母親らしき女性が「ノブちゃん、おいたしやダメでしょ！」と、子供を叱る声が聞こえた。

郁子は思いがけない偶然に、驚きの表情を浮かべる。

——ノブちゃん。

一度、信之の実家に行ったときに信之の母親がそう呼んでいたこ

とを思い出す。

信之は郁子に『ノブちゃん』と呼ばれていることを知られ、ばつが悪そうに顔を歪めて、その呼び方はやめてくれって言ってるだろと文句を言っていた。その困ったような顔がおもしろくて、しばらく信之のことを『ノブちゃん』と呼んでからかったりしたものだ。

母親に叱られた男の子——ノブちゃんは、上目遣いに母親の顔を見上げていたが、母親が店のマスターらしき人にグラスを割ってしまったことを告げに行くと、郁子の方を見てニツコリと笑った。

そのいたずら小僧のようなあどけない笑顔を見て、郁子の口元にも笑顔が浮かぶ。

なんとなくノブちゃんの笑顔が、子供の頃の信之を見ているように思わせた。

（そういえば、信之もいたずらをしては、よくお母さんに怒られたって言ってたっけ）

割れたグラスが片付けられるのを待つて、母親はレジで会計を済ませ、ノブちゃんの手を引いて店を後にする。

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

親子が店から出て行く間際に、マスターが軽く頭を下げて親子を送り出す。

そのやり取りを見届けた後、郁子は腕時計で時間を確認する。そろそろ休憩時間も終わりだ。

郁子はテーブルのレシートを取るとレジに向かった。

「ご馳走さまでした。コーヒーとってもおいしかったです」

「左様でございますか。お褒めいただきありがとうございます」

マスターは穏やかな笑顔を郁子に向けてレシートを受け取った。

（なんて優しい笑顔なんだろう）

接客用ではなく心からの言葉だと確信できるような笑顔だ。見ていだけで胸の奥がほっと暖かくなる。

いくつくらいの年齢だろうか。日に焼けた褐色に近い肌には張りがある、若いなどとはまったく感じさせないが、立ち振る舞いから

は大人の落ち着きを感じさせる。少なくとも郁子に近しい年代ということはないだろう。十代、二十代にあるような青臭さはまったく見受けられない。喫茶店のマスターでたいいの人がイメージするであろう口ひげこそ生やしてはいないが、腰にはダークブラウンのエプロン、上は清潔な白のシャツに黒のベストを羽織り、襟元には黒の蝶ネクタイ。典型的な正装姿でマスターは郁子に頭を下げた。「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」マスターの声を聞きながら、郁子は店を出た。なんだか足取りが軽い。

素敵なお店だな、と思い振り返る。

——C a f e ? 憩 ?

店先の看板にはそう書いてあった。

——カラン、カラン。

扉を開くと高く澄んだ鐘の音。郁子は今日も？憩？に来ていた。

ここ数日通い詰めだ。

店の落ち着いた雰囲気郁子の心を和ませてくれた。

全体的にブラウンで整えられた店内。照明は蛍光灯の明るすぎる白い光ではなく、電球のようなオレンジ色の淡く柔らかな光。ただ、大きなガラス窓から差し込む日の光も手伝って、薄暗いという気はしない。昭和風の喫茶店とでもいうのだろうか。

店内は入り口から入って左手に高いカウンターがあり、カウンタ―越しの壁には様々なグラスやコップが並べられている。向かって右側にはガラスの窓際にテーブルが三つ。その一つに郁子は座った。今日はウィナーコーヒーを注文する。そろそろこの店のコーヒーを制覇しそうだ。

店内を見回してみる。

カウンターには30代半ばと思われる男性が一人。入り口から一

番奥のテーブルには女性が一人。背を向けているので顔はわからないが、郁子とそんなに歳が違わないように感じる。

（あまり流行っていないのかしら？　こんなにコーヒーがおいしいお店なのに……）

内心、首を傾げる。店の雰囲気もいいし、コーヒーの味は抜群に美味しい。人通りも多い。この条件でお客さんが少ないなんて。もつとも、あまり人が多すぎると落ち着いた雰囲気も壊れてしまうから、郁子にとっては人が少ない方がいいのだけれど。

「——お送りした曲は、ラジオネーム『ちゃつぷりん』さんからのリクエストでした。今週の『あなたの思い出の一曲』続いては……」ラジオのDJの声が聞こえてくる。この店は有線を引いていないらしく、店内にはFM放送のラジオが流れている。

「ラジオネーム『黄昏の肉まんさん』からのリクエストメール。『はじめまして、こんにち。私の思い出の曲は、いつも彼とカラオケに行くと、おまえの為にライブステージだぜ、と言って最後に必ず彼が歌ってくれる曲です』という内容です。うーん、なかなかキザな彼氏ですねえ。それでは『黄昏の肉まん』さんからのリクエスト、曲は……」

「あはっ！」

思い出の内容を聞いて笑ってしまった。同じようなことが郁子にも覚えがある。

信之もドライブなどに出かけたときに、車の中で『この曲をあなただけに捧げます……』などと言ってよく歌を歌ってくれた。郁子は『キザなやつ』と茶化しながらも、いつも最後までちゃんと聴いていた。

「……信之の他にもこんなことする人いるんだ」

コーヒークップの中に映る自分に語りかけるように、ぽつりと呟く。

信之はいつも歌い終わった後に『どうだ？　惚れ直しただろう？』

と言ひ、郁子は自分の素直な気持ちを打ち明けるのがなんだか気恥ずかしくて『えー、えー。惚れ直しましたとも』と冗談っぽく応えた。すると信之は子供のように嬉しそうな笑顔を見せてくれた。その笑顔が大好きだった。

（何故だろう。この店に来ると信之との楽しかったことが思い出される）

——プルルルル！

突然電子音が鳴る。ハンドバックの中にある携帯電話のメール着信の音だ。

——信之！？

慌ててハンドバックから折りたたまれた携帯電話を取り出してメールを確認する。

「……？」

メールは信之からのものではなく、メールアドレスは覚えのないものだった。少し躊躇した後、内容を確認する。

『奈緒。元気にしてるか？ ごめんな、奈緒。オレやっぱり今でもおまえのことが好きだよ。あれからずっと思ってた。オレ、奈緒に会いたいよ』

「……」

郁子宛ではないメール。おそらく間違いメールだろう。短く、飾り気のない文章。けれど送った人の素直な想いが感じられた。

どういった事情で送ったメールなのかわからない。でも、送った人の気持ちが郁子にはよくわかる。

（この人も同じだ。私と同じ想いなんだ……私も会いたい。信之に会いたいよ……）

郁子は携帯電話を握り締めながら俯き、唇を噛み締める。

しばらくした後、郁子は顔を上げてメールを打ち始めた。

『ごめんなさい。私は奈緒さんという方ではありません。おそらく間違って送ってしまったのだと思います。まったくの気づ知らずの

私が言うのもおかしいかもしれませんが、もう一度、あなたの想いを奈緒さんに伝えてあげてください。きっと奈緒さんもあなたの想いを待っていると思います。私も同じだから。私も大好きな人に会いたいから。』

なんだか放って置けなくて返信する。

偶然に届いた間違いメール。それが郁子に改めて信之への想いに気付かせてくれた。

人を好きになるって きれいな事ばかりじゃないさ

苦しく 辛く 悲しいこともたくさんある

互いの気持ち が すれ違ってしまふこともある

だけど 側にいたいと 心から想う

だけど 側にいて欲しいと 心から願う

たぶんそれが 人を好きになるってこと

僕は君の側にいたいと思う

僕は君に側にいて欲しいと願う

世界中の誰より 大切な君に

店内に歌が流れる。ラジオから流れる思い出の一曲。それは信之が郁子のために歌ってくれた歌と同じ曲だった。

想いが溢れてくる。心にあつたわだかまりが、スーッと溶けて

ゆく……

（会いたい。信之に会いたい）

「——お客さま。いかがなされましたか？」

気が付けば、目の前に真っ白なハンカチが差し出されていた。

「え!？」

いつの間にか頬を伝う涙に、郁子は気付かなかった。

「あ、あれ？」

慌てて頬に手を当てる。窓から差し込む日の光に、キラリと指先が光を弾く。

「……あ……ご、ごめんなさい。な、なんでもないです！」

「どうぞ。お使いください」

マスターの優しい笑顔。郁子はハンカチを受け取り、そっと涙を拭う。

見ず知らずの他人に涙を見られた。不快ではないけれど、すぐく
気まずい。頬が赤く染まっていることが自分でもわかる。少し顔を
伏せながら、

「……どうも、ありがとうございました。あの……ハンカチ、お洗
濯してからお返しします」

「いいえ、結構でございますよ」

ふわり、と微笑むマスター。

「あ……そ、その！ ここつて、お客さん、す、少ないですね」

気恥ずかしさも手伝つて、郁子は慌てたようにマスターに向かっ
て話す。そして話し終えてから、なんて失礼なことを言っているん
だろう、とますます顔を俯けてしまった。

「左様でございますね。こちらにお越しいただくお客さまは皆？ 想
い？をお休めに来られる方ばかりでございますから」

思いもかけない返事に、郁子は顔を上げてマスターを見つめる。

「？ 想い？をお休めに……ですか？」

「はい。人は誰かを想い日々を過ごしています。親、兄弟、友だち、
そして……恋人。人の数だけ想いの数もあります。ただ、ときに
強い？ 想い？は自分では抑えきれないこともございます。そういつ
た方々がこちらにご来店いただき、ほんの一時　？ 想い？をお休め
になられていかれます」

「？ 想い？をお休めに……」

そつと呟いてみる。

思えばこの店に来てから、郁子の心はずいぶん穏やかになった気
がする。まだ不安はある。けれど、それ以上の？ 想い？が自分には
あることに気付いた。いや、気付かせてくれた。

（……そっか。私の？ 想い？もここで休んでいたんだ……）

「お客さまもお寛ぎいただけましたでしょうか？」

「——ええ。とっても」

郁子はニツコリと微笑む。それは、迷いのない晴れやかな笑顔だった。

「私、そろそろ行きます」

「かしこまりました」

マスターはそう応えると、テーブルのレシートを取ってレジに向かう。郁子もその後が続いた。

「とっても素敵なお店ですね、ここ。私、毎日でも来ちゃいそう」

「ありがとうございます。ただ、お客さまはもう、こちらにはお越しにならないと思いますよ」

「えー？」

「お客さまの？想い？は充分にお休みになられたかと思えます」

郁子はしばらくマスターを見つめた。そして――

「そうですね。私にはもう、ここは必要ないのかも……だって、いっぱい休ませてもらったから……」

『ありがとうございます』とマスターに頭を下げ、カラン、カランという鐘の音と共に郁子は？憩？を後にする。

雲一つない真つ青な空が清々しい。

「うーん。いい天気！……よし！！」

——ピッピッピッ。

携帯電話を取り出して、信之に電話をかける。

——プルルルル！。プルルルル！。

今は電話に出ることが出来ないのかもしれない。けれど、郁子は今信之に電話をしたかった。

出なくてもいい。

焦ることはない。

もう迷わないと決めたのだから。

例えすれ違ったとしても、二人の？想い？が重なるまで歩き続ければいいだけのことだ。

郁子は携帯電話を持ったまま振り返る。店先の看板が目に入った。

——C a f e？憩？

（憩いの憩う場所……か）

——プルル……ピッ！

「……郁子……」

聞き慣れた声がして、郁子は一度大きく深呼吸をする。

「——もしもし……」

そして郁子は歩き出す。大切に想う人の元へ——

あなたには誰よりも想う人がいらっしやいますか？

あなたには誰よりも想ってくれる人がいらっしやいますか？

皆様のご来店、心よりお待ち申し上げております

？憩？店主　　）

）

——了——

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
今度は新作を書ければ・・・と思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5636p/>

想いの憩う場所

2010年12月19日04時25分発行